

平成 2 6 年 5 月 2 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330194

研究課題名（和文）良好な対人関係を築くコミュニケーション方法の考案：言語心理学モデルの構築と応用

研究課題名（英文）Communication as a Tool for Promoting Interpersonal Relationships: A Linguistic-Psychological Model and Its Practical Applications

研究代表者

唐沢 稯 (Karasawa, Minoru)

名古屋大学・環境学研究科・教授

研究者番号：90261031

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,900,000 円、（間接経費） 2,670,000 円

研究成果の概要（和文）：対人相互作用や紛争解決の文脈における認知過程と言語使用の相互関係を記述し、その心理的基盤を説明するための理論モデルの構築を試みた。併せて、モデルを検証するための実証研究を、主に心理学実験の方法を用いて行った。さらに、認知と発話行為の基盤として作用する文化の影響についても吟味した。その成果をもとに、日本語教育や紛争解決の実務に適用が可能な教材開発を試みた。研究成果公表のための、学会シンポジウムやワークショップ等の開催においても成功を収めた。

研究成果の概要（英文）：We attempted to construct a theoretical model that can explain the inter-relationship between cognitive processes and particular language use in the context of interpersonal relations including the process of cultural adaptation and conflict resolution. In order to test some of the propositions in the model, a series of empirical studies were conducted, mainly on the basis of experimental methods. We also revealed the role of culture as a basis for cognition and linguistic acts. Symposia and workshops were organized at different conferences to present the findings.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：言語コミュニケーション 社会的認知 異文化間接触 紛争解決 文化と認知

1. 研究開始当初の背景

(1) 対人関係的言語使用の理論モデル構築と実証的研究

対人関係の中での言語の役割を検討する際、言語学(社会言語学、語用論)と社会心理学の各領域のもつ視点を統合することが重要である。後者においてはデータを統計的に扱うことのみならず、状況要因を統制した議論を導入することが可能であり、それが問題の解明に資すると考えられる。そこで、研究分担者・岡本を中心に理論的検討を行った。そこでは、岡本が従来から進めてきた、行動指示、アイロニー、関与権限を配慮した言語行動等の相互関連性に関する知見が基礎となった。

(2) 援助の申し出/依頼表現と文化:

対人関係を考慮した言語使用を行うためには、当該の言語集団において共有された文化的共通認識が重要な役割を果たすはずである。そこで、対人関係においてクリティカルな局面を構成する「援助」の申し出と依頼場面を具体的題材にとりながら、上記の可能性を検証した。文化心理学的知見により、援助場面においては、北米では互いの行動に際して相手の意図の確認が重視されるのに対し、アジアでは状況要因に着目し、相手の意図を読み取って行動することが必要とされることが示されてきた。言語学においては援助者の表現において、英語話者では日本語話者より相手の意図や願望を確認する表現の出現頻度が高いことが知られている。これらの知見を総合して実証的検討を

(3) 認知と言語使用の文化的基盤

言語使用の文化的基盤と認知過程の関連を明らかにするためのもう一つの主要テーマとして、カテゴリー的知識や行為主体性(agenticity)の認知と言語使用の関連、そしてそれを規定する文化的基盤の役割を検討した。認知心理学分野では、カテゴリー化の過程や行為主体性の認知は、典型的には通文化的なものであると考えられてきた。これに対し、カテゴリー的知識の運用とそれに関わる言語使用の中には、文化的共有性に基礎をおくものが多数あることを、実証的研究によって示すことを目指した。

(4) 日本語教育への応用

言語学、特に語用論の分野において、他者への非難、配慮、謝罪といった対人関係維持に関わる言語表現や言語使用について数多くの研究がなされてきた。しかし、文化的背景の違いなどから対人関係での問題が生じやすいと推察される留学生(日本語学習者)を対象とした研究は少なく、また日本語教育においてこのような観点を主題とした教材はほとんど見当たらない。

(5) 紛争解決過程における言語使用の内容

現実の対人関係言語の使用実態を明らかにするための一つの接近法として、裁判・調停・仲裁などの葛藤場面に題材を求めることを着想した。具体的には、民事的分野におけ

る法廷外紛争解決手続き、中でも特に「調停」は、当事者たちに話し合いをさせることによって、法律の枠を越えた解決策を相互協力のもとに見出して行くプロセスであることから、社会心理学や言語学などコミュニケーションに関わる知見が有効に活かせると考えた。

2. 研究の目的

(1) 対人関係の中での言語の役割を検討するために、行動指示表現や関与表現に関して、従来の知見を発展させ、より体系的な枠組みを構築することが目的であった。その成果は、日本語話者における認知過程と言語使用の関連を手がかりとしながら、発話行為に関わる一般的理解を可能にすることが期待された。

行動指示:「おまちください」「おまちになってください」のような才接頭行動指示表現の状況的使い分けを解明することを目指した。また、関連して「～さんがお待ちになっていただく」のような「誤用」とされるイタダク形式が許容的に表現される状況を検討した。

関与表現:文末形式の直接形、間接形の使い分けに加えて、終助詞ネの使い分け、さらには行動指示表現や行動評価表現の使い分けが、話し手・聞き手の関与権限の大きさとのように関わるかを検討した。また、特に他者内心の表現制約の解除がなされる条件を解明して、関与権限との関わりを明らかにすることを目指した。

(2) 次に、援助場面における言語使用ならびにその際の状況人や文化学習の程度の関連を具体的な題材として採用し、文化心理学的検証を行った。特に援助のやりとりにおける言語表現において、援助者からの申し出と被援助者からの依頼のどちらがよく行われるか、さらにはその際「明示的」と「暗黙」のいずれの表現が用いられるかを検討し、このような言語表現が文化適応に及ぼす影響を明らかにした。

(3) 無数にあると言ってもよいほど多種多様な社会的カテゴリーの中から、どのカテゴリーが「意味」を創出するかが文化的共有性に根ざすこと、そしてそれが言語使用と連動していることを示すための実験研究を行った。また、行為主体性の認知については、それが他動詞・自動詞の使い分けと連動しており、さらに責任知覚や対人的な印象管理の過程と関連していることなどを示すことを目指した。

(4) 日本語母語話者と日本語学習者(留学生)を対象に、対人関係配慮における言語表現データを収集し、比較検討を行なった。取り上げたのは援助場面で、典型的な表現だけでなく、会話のやりとりを通して暗黙的に行なわれる「申し出」や「依頼」にも注目して分析した。さらにその検証から得られた知見を基に、言語コミュニケーションに関する教材作

成も試みた。

(5) 調停での会話資料などをもとに、言語資料をコーパス化し、「紛争言語データ・ベース」の構築すると共に、紛争当事者が実際に用いる言語表現と発話行為の分析を通して、紛争に関わる語彙と言語的次元を抽出した。

3. 研究の方法

(1) 行動指示：オ接頭表現に関しては状況を体系化し、諸形式がどのような場合に使用されるかの分析を行った。また、イタダク形式に関しては実際の使用例を日常の対面コミュニケーションやテレビ・ラジオ放送から収集し使用例を分析するとともに、使用条件を明確化するために変数を統制した質問紙実験を行った。

関与表現：従来の実験結果や使用事例の分析を行った。また、とくに内心表現の制約解除に関しては、変数を統制した質問紙実験を行った。

(2) 日本とイギリスで援助場面とその際の会話について記憶再生の自由記述を行ってもらい、援助のやりとり後の感情を評定してもらった。援助場面記述における「テクレル」「テモラウ」表現についても分析を進めた。また、収集した援助場面を日本語母語話者ならびに日本語学習中の留学生に提示し、想定される会話を書き込んでもらう調査を実施した。

(3) カテゴリー知識の創発的運用に関する研究では、日本語話者とイタリア語話者の比較により、前者の文化では意味を持つが後者ではほとんど意味をなさない「年長・年少」の年齢カテゴリーが記憶表象に及ぼす影響と、丁寧語・親密語（タメ口）の使い分けとの関連を実験的に吟味した。

(4) 日本語母語話者と日本に留学中の日本語学習者に幾つかの援助場面を提示し、その際の会話を想像して自由に書いてもらう調査を行なった。想定された人間関係の記述も含め、言語表現をコーディングし、データ・ベースを作成した。それを基に、母語話者と学習者それぞれの言語表現の特徴を明らかにし、教材作成に反映させることを試みた。

(5) 日本弁護士連合会および東京、大阪、京都の弁護士会や司法書士会などで開催されている、調停員のトレーニングに参加したり、調停員にインタビューすることによって、実務におけるニーズを調査した。また、模擬調停での会話資料などの提供も受けた。

4. 研究成果

(1)

行動指示：オ接頭表現に関しては、接頭語オやその他の敬語の使用による丁寧さと、クダサイの直接性が衝突するため、敬語形式が丁寧になるほど使用可能な状況が限定されていくことが明らかにされた。また、イタダク形式に関しては、その使用が「＜S が～して＞いただく」という異分析がなされやす

い条件と関連していることが示唆された。

関与表現：話し手と聞き手の関与権限の大小関係が諸形式の使用に関わっているが、終助詞ネに関してはさらに、話し手が情報の独占的管理を行う状況にないことが影響することが示された。また、文脈や前置き等によって話し手が他者領域に入りうる立場であることが明示もしくは含意されることが判明した。また、以上のような使い分けの多くの部分は、ポライトネスの見地で説明可能であることも示唆された。

(2) テクレルを含む状況文に対しては、与え手からの申し出表現を会話内に含む傾向が見られたが、テモラウを含む状況文に対しては会話内の依頼表現・申し出表現双方が見られた。援助者からの申し出表現は日本語母語話者でより多い傾向が見られた。これらの表現と文化への適応の傾向を、今後も継続的に検証していくための基盤が構築できた。（これらの結果の報告は、平成 24 年日本心理学会大会ならびに平成 25 年日本社会心理学会における、ワークショップの中核をなすものとなった。）

(3) カテゴリー知識の創発性研究では、記憶混同を利用した “Who said what paradigm” を用いた実験により、年齢カテゴリーの自発的使用が日本語話者のみにみられ、しかもこれが丁寧語・親密語の使用と関連することを示唆する結果が得られた。これはカテゴリー知識の運用と言語使用の文化的拘束性を示すものであり、この成果に基づく論文を国際学術誌に公刊した。一方、行為主体性認知と動詞の他動性に関する研究では、結果に不明確な部分があり、将来の更なる検討が課題として残された。

(4) 道具的、情緒的援助など様々な援助場面における言語データを収集し、コーディングすることにより、明示的・暗黙的表現のほか、共起する感謝や謝罪表現、会話開始者や文節数など、様々な側面から検証できるデータ・ベースを構築することができた。この成果を基に教材を作成し、筆者が担当している日本人学生と留学生の合同授業である全学共通教育科目において活用している。

(5) いくつかの模擬調停の反訳、調停員経験者の書いた川柳約 2000 首をもとに、紛争言語データ・ベースを構築した。このような基礎資料をデータ・ベース化したことで、研究期間終了後も必要に応じて貴重な言語資料として利用することが可能になった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

- Karasawa, M., Maass, A., Rakić, T., & Kato, A. (2014). The emergent nature of culturally meaningful categorization and

language use: A Japanese-Italian comparison of age categories. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 45, 431-451.

- 岡本真一郎 (2014) 他者内心制約が解除される条件: 調査的研究 愛知学院大学心身科学研究所紀要「心身科学」69-13.
- Uchida, Y., Ueno, T., & Miyamoto, Y. (2014). "You were always on my mind: The importance of "significant others" in the attenuation of retrieval-induced forgetting in Japan." *Japanese Psychological Research*, in press.
- Ueno, T., Tsukamoto, S., Kurita, T., & Karasawa, M. (2014). Incorporating social psychological theories in the model training regime: How do neural representations for social cognition emerge from interactions with others? *Proceedings of the 36th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, in press.
- 吉成 祐子 (2014) 「日本語らしい表現を検証する方法の提案: 日本語母語話者と学習者の移動事象記述の比較より」*Journal CAJLE*, Vol.15, in press.
- Adachi, K., Yama, H., Van der Henst, J.-B., Mercier, H., Karasawa, M., & Kawasaki, Y. (2013). Culture, ambiguity aversion and choice in probability judgments. *International Journal of Creativity & Problem Solving*, 23(2), 63-78.
- Matsui, T., & Yamamoto, T. (2013) Developing sensitivity to the sources of information: Early use of the Japanese quotative particles *tte* and *to* in mother-child conversation. *Journal of Pragmatics*, 59, 5-25.
- 岡本真一郎 (2013) ミス・コミュニケーション-誤解の実態調査と検討課題- 愛知学院大学論叢『心身科学部紀要』 9, 25-29.
- 岡本真一郎 (2012) 関与権限と言語表現 - 「情報のなわ張り理論」の修正と拡張 日本語文法, 12(1), 37-53.
- 菅さやか・唐沢穰 (2011) コミュニケーション場面における社会的文脈の知覚が情報伝達に与える影響 人間環境学研究, 9, 25-31.
- 吉成 祐子 (2011) 「内容重視型教育に基づく日本語授業の試み-アジャнкт・モデル授業の提案」*岐阜大学留学生センター紀要*, 19-28.

〔学会発表〕(計 25 件)

- Karasawa, M. (2014). Blameworthy character invites harsher punishment: A social psychological approach to punitive motives against individuals and groups. Keynote speech at the joint meeting of the 4th Asian Conference of Psychology and the 4th Asian Conference on Ethics, Religion & Philosophy. Osaka International Convention Center (March

28, 2014).

- 柏井希与、藤野博、篠田もえぎ、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2014) 高機能 ASD 児におけるイベント・ナラティブの特徴 定型発達児との比較 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 22 日
- 篠田もえぎ、藤野博、柏井希与、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2014) 高機能 ASD 児におけるパーソナルおよびフィクショナル・ナラティブの特徴 定型発達児との比較 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 22 日
- 長谷川絵里、藤野博、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2013) 高機能 ASD 児における皮肉の理解と課題のタイプの関係 文章・アニメーション・実写動画条件の比較 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 22 日
- 堀田 秀吾 (2013) 「調停研究班の調査経過報告および今後に向けて」 日本心理学会 5 回年次大会 シンポジウム「言語行動研究の魅力: 心理学にもたらすインパクトについて考える」, 北海道医療大学 2013.9.19
- 神井享子、藤野博、田中望、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2013) 自閉症スペクトラム障害児における心の理論と実行機能の関連について 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 22 日
- 京野千穂・内田由紀子・吉成 祐子 (2013) 「授受表現テモラウ・テクレルが示す話者の感情と認知」 "ワークショップ: 言語と心のインターフェイス," 日本社会心理学会 第 54 回大会 (沖縄国際大学、宜野湾市) 2013.11.3.
- 松井智子 (2013). 「言葉と声で気持ちを理解するー言語発達と文化差についてー」シンポジウム「言語行動研究の魅力: 心理学にもたらすインパクトについて考える」日本心理学会第 77 回大会 札幌コンベンションセンター 2013 年 9 月 19 日
- 三浦優生、藤野博、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2013) 自閉症スペクトラム児における感情プロソディの理解 (2) 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 21 日
- Miura, Y., Matsui, T., Rakoczy, H., & Tomasello, M. (2013). Cross-linguistic difference in children's sensitivity to speaker certainty: evidence from corpus and experimental data. In Paper symposium: Understanding Speaker Knowledge through Verbal Expressions: Cross-Cultural Comparison Society for Research in Child Development 2013 Biennial Meeting Washington Convention Center, Seattle, Washington, U.S.A. 2013 年 4 月 18 日
- 田中望、藤野博、神井享子、松井智子、東條吉邦、長内博雄 (2013) 高機能 ASD 児における "ホット" な実行機能と心の理論の関連 日本発達心理学会第 25 回大会 京都大学 3 月 22 日

- 内田由紀子・吉成 祐子・京野千穂 (2013) 「言語と文化援助行動における言語表現の検証」ワークショップ：言語と心のインターフェイス，日本社会心理学会第 54 回大会 沖縄国際大学 2013.11.3.
- Yoshinari, U. (2013). "Describing motion events in Japanese L2 acquisition: How to express deictic information.", International workshop SYLEX3: Space and motion across languages and applications, 2013.11.21., Universidad de Zaragoza, Spain.
- 吉成 祐子 (他 2 名) 「移動表現における第二言語学習者間の言語化傾向：日本語・英語・ハンガリー語を比較して」言語科学学会第 15 回年次国際大会、2013 年 6 月 28 日、活水女子大学
- 吉成 祐子・内田由紀子・京野千穂 (2013) 「援助行動における言語表現：第 2 言語習得の観点から」ワークショップ：言語と心のインターフェイス，日本社会心理学会第 54 回大会 沖縄国際大学 2013.11.3.
- Hotta, S. (2012) Introduction of the Lay-judge System and its implications for the Development of Forensic Linguistics in Japan. Seventh Conference on Legal Translation, Court Interpreting and Comparative Legilinguistics (招待講演) (2012.6.30) Adam Mickiewicz University, Poland, OR, USA
- Lee, T., Fiske, S. T., & Karasawa, M. (2012). Immigrant stereotypes: Impact of societal diversity on target images and lay theories about outgroup perception., 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (2012. 1. 27) San Diego, CA, U.S.A.
- 内田由紀子 (2012) 援助行動における言語表現と関係性の説明：日本文化における検証 日本社会心理学会第 53 回大会 (2012.11.17) つくば国際会議場
- Yoshinari, Y. (2012). The relationship between language use and cultural context: from the point of view of linguistic expressions on helping behavior in English and Japanese. Experimental and Empirical Approaches to Politeness and Impoliteness. (2012.8. 29). Urbana IL, USA
- Karasawa, M. (2011) Social groups as a basis for explanations: How ordinary perceivers make sense of other people's behavior. Asian Association of Social Psychology (基調講演) (2011. 7. 29), Kunming, China
- 松井智子 (2011) 「コミュニケーションする心」はどのように育つのか ワークショップ「心の理論」 実証的研究と哲学的検討 (基調講演) (2011 年 6 月 20 日) 東京大学
- Matsui, T. (2011a). Developing sensitivity to the sources of knowledge. 12th

- International Congress for the Study of Child Language (2011.7.23)
- Matsui, T. (2011b) Children's understanding of the speaker as the source of knowledge. Workshop on children's pragmatic and metarepresentational development (基調講演) (2011.9.2) University of Oslo
- Matsui, T. & Yamamoto, T. (2011). The use of the Japanese hearsay particle TTE in mother-child conversation. 12th International Pragmatics Conference (2011.7.7). Manchester UK.
- Yoshinari, Y., Pardeshi, P., & Chung, S-Y (2011). Use of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study. A psycho-linguistic study. Japanese/Korean Linguistics Conference 21. (2011. 10. 20)
- 〔図書〕(計 12 件)
- 八田武志・戸田山和久・唐沢穰 (監訳) (2014) 『本当は間違っている心理学の話 50 の俗説の正体を暴く』(スコット・O・リリエンフェルド/スティーヴン・ジェイ・リン/ジョン・ラッショ/バリー・L・バイアースタイン著 50 great myth of popular psychology: Shattering widespread misconceptions about human behavior. Wiley) . (総 433 頁)
- 堀田 秀吾 (2014) 『なぜ、あの人の頼みは聞いてしまうのか? 仕事に使える言語学』ちくま新書 (総 203 頁)
- Haslam, N., Holland, E., & Karasawa, M. (2013). Essentialism and entitativity across cultures. In M. Yuki & M. B. Brewer (Eds.), Culture and group processes (pp. 17-37). New York: Oxford University Press.
- 堀田 秀吾 (2013) 『飲み席には這ってでも行け! 人づき合いが苦手な人のための「コミュカ」の身につけ方』青春出版社 (総 192 頁)
- 堀田 秀吾 (2013) 「商標 心理学の商標分析への応用と課題」藤田政博 (編) 『法と心理学』(分担執筆 第 12 章, 189-201 頁) 法律文化社.
- 松井智子 (2013) 『子どものうそ 大人の皮肉 ことばのオモテとウラがわかるには』東京: 岩波書店 (総 229 頁)
- 宮本聡介・唐沢穰・小林智博・原 奈津子(編訳) (2013) 『社会的認知研究: 脳から文化まで』(S. T. フィスク/S. E. テイラー著 Social cognition: From brain to culture. McGraw-Hill.) (総 554 頁)
- 岡本真一郎 (2013). 言語の社会心理学 伝えたいことは伝わるのか 中央公論社 (総 277 頁)
- 橋内武・堀田 秀吾 (編著) (2012) 法と言語～法言語学へのいざない くろしお出版

(総 264 頁)

- 五百田達成・堀田 秀吾 (2012) 特定の人としかうまく付き合えないのは、結局、あなたの心が冷めているからだ クロスメディア・プブリッシング (総 223 頁)
- 松井智子 (2011) メタ表象能力の発達と発話理解 吉村あきこ他 (編)『ことばを見つめて』(分担執筆 77-94 頁) 英宝社
- 岡本真一郎 (編著) (2011) ミス・コミュニケーション - なぜ生ずるか どう防ぐか ナカニシヤ出版 (総 200 頁)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

(1) 研究代表者

唐沢 穰 (KARASAWA, Minoru)
名古屋大学・大学院環境学研究科・教授
研究者番号：90261031

(2) 研究分担者

・ 岡本真一郎 (OKAMOTO, Shin'ichiro)
愛知学院大学・心身科学部・教授
研究者番号：80191956

・ 松井智子 (MATSUI, Tomoko)
東京学芸大学・国際教育センター・教授
研究者番号：20296792

・ 堀田 秀吾 (HOTTA, Syugo)
明治大学・法学部・教授
研究者番号：70330008

・ 内田由紀子 (UCHIDA, Yukiko)
京都大学・こころの未来研究センター・准教授
研究者番号：60411831

・ 吉成 祐子 (YOSHINARI Yuko)

岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号：00503898

(3) 連携研究者

()

研究者番号：